

寅彦と宇宙線、その後

石原 幸男

梅棹忠夫『知的生産の技術』に次の文章がある。

ある作家の作品のなかに、只棹埋男（たださおうめお）翁という老学者がでてきて、おどろいたことがある。その老人は、しめきりがきても文章ができあがらないので、たいへんくるしむのだが、夜中になると、とつぜんにキツネがやってきて、とりつく。すると、たちまちにして文章ができあがる、というのである。

この「ある作家」とは小松左京である。筆者の記憶では、小松はこのキツネつきを「宇宙線が脳細胞を刺激したもの」としていたと思う。『榊』第103号で山田功氏が紹介している寺田寅彦の文章と似ている。あるいは小松もこれを読んでいたのだろうか。

思えば『日本沈没』も、ウェゲナー「大陸移動説」から小松の脳を宇宙線が刺激して生まれたものだろうか。そのウェゲナー説も、寅彦が逸早く支持していたものである（四宮義正『地球物理学』の中国語訳本と「大陸移動説」『榊』第86号）。

さてその宇宙線であるが、主な成分は陽子で、人の脳を直接刺激することは稀なようである。多くは上空の空気分子と衝突して多量のミュオン（ μ 粒子）を放出する。これは「空気シャワー」と呼ばれる。ミュオンのほうは近年ではエジプトのピラミッドの透視のような実用に用いられている。しかしかつて、加速器を造れなかった時代には空気シャワーの観測が素粒子研究の大きな手段だった。

そんな1970年代、高知大学の佐々木宏助教授（当時、後の理学部長）がその観測を行っておられた。筆者はアルバイトでその観測装置の部品の組み立てをやったことがある。そのバイト代の大半は佐々木研究室での毎夜のビールと焼肉の宴に消えたのだが、ともかく寅彦没後40年くらいの頃には宇宙線観測も高知に根付いていたのである。

—— ** —— ** —— ** —— ** —— ** —— ** —— ** —— ** —— ** —— ** —— ** ——

講演会のお知らせ

令和7年度寺田寅彦記念館友の会秋季研究会の講演会を下記の日程で行います。

日 時 令和7年10月19日（日）

講 師 川島禎子氏（高知県立文学館主任学芸員）

14：00～ 講演会

場 所 寺田寅彦記念館

その他

演 題 「子規と寅彦」

予定ですので、HP等で確認をお願いします。